

山部宿禰赤人 自然を孤悲慕つ歌人

上代文学演習乙(日吉先生担当)

〇三二一

万葉集 卷第三

登神岳山部宿禰赤人作歌一首 并短歌

三三四 三諸乃 神名備山尔 五百枝刺 繁生有 都賀乃樹乃

弥継嗣尔 玉葛 絶事無 在管裳 不止将通 明日香能

旧京師者 山高三 河登保志呂之 春日者 山四見容之

秋夜者 河四清之 日雲一 多頭羽乱 夕霧丹

河津者驟 每見 哭耳所泣 古思者

反歌

三三五 明日香河 川余藤不去 立霧乃 念応過 孤悲尔不有国

(『新選万葉集抄』笠間書院)

【第十四句目「河登保志呂之」について】

「大なり」の意味とするもの＝契沖・真淵・橋本・新編日本古典文学全集

新日本古典文学大系など

川トホシロシトハ、大キニユタケキ意ナリ。神代記下云。集ニ大小之魚一。

(『契沖全集 第二卷』一〇二頁)

とほしるきは何にても大きな事、(『賀茂真淵全集 第四卷』二五四頁)

「大」の義に解すべきである。(『上代語の研究』「とほしるし」考 一六七頁)

トホシロシは雄大であるの意。(『新編日本古典文学全集 6 万葉集一』二〇二頁)

川が雄大だ。(『新日本文学大系1 万葉集一』二二九頁)

「あざやか」の意味とするもの＝宣長など

とほしるしは、あざやかなる事也、凡てあざやかなることをしるしといふ、いちしるきも是也、

(『本居宣長全集第六卷』「万葉集玉の小琴卷三」四三頁)

「あぢやか・さやけし」の意味とするもの『荒木田久老など』

灼然を、いちじろしといふをむかへて、此とほじろの言を考るに、いちと、とほとは、その意相近し。いちとは、あるが中にぬき出ていふ言にて、俗にいッち、至ッて、なといふ言にて、至イタリのたりを約めて、いちとはいふなるべし。さては、とほも達のほの意にて、達と、至とは、やゝ近し。いづれ白きは、あぢやかなるをいへば、さやけしといふにおなじ。

（荒木田久老『萬葉考槻落葉』 六二頁）

#### A についで

宣長は「とほじろし」の後半「じろし」を、顯著の義を有する「じろし」と同形であるところから、之と同語と考えたものと見なければならぬが、然らばその前半の「とほ」はどんな意味を有し、いかなる役目をしてゐるか。すべて、一の語に他の語又は接頭語が加はつて一語を成す場合には、それだけ意義が加はる筈であるのに、「じろし」に「とほ」の加はつた「とほじろし」は、「じろし」とどれだけ意味の相違があるか。かやうな疑問に對して適當な解答を與へる事が出来ない以上は、この説も唯漫然と語の一半の意義を以て全體の意義を臆測したに過ぎないのであつて、我々は容易に之を信ずることは出来ない。しかるに宣長はこの點について何の説明をも與へて居ないのである。

（橋本進吉『上代語の研究』「とほじろし」考 一五九頁）

#### B についで

「とほ」「は」「達のほ」「の」「とほ」「で、至イタリつての義に近いと説明して居るが果たして「とほ」にそんな意義用法があるのであらうか。他に適切な類例でもないかぎり、たやすくこの説明に満足することは出来ない。

（『上代語の研究』「とほじろし」考 一五九頁）

#### C についで

萬葉集に於いては、「とほじろし」「の」「ろ」「には臣のの字を宛て、「じろし」「白（白）又は「いちじろし」「の」「ろ」には路のの字を宛てて居るが、元來萬葉時代には「ろ」の假名は概して二類にわかれて居たのであつて、呂と路とは別の類に屬し、少數の例外はあるが殆ど混用する事なく、隨つて、當時その發音を異にしたものらしく考へられる。さすれば「とほじろし」「の」「じろし」「と」「じろし」「白（白）及び「いちじろし」「の」「じろし」

とは同音でなく、随つて、之を同語と認める事は容易に許されないのである。

『上代語の研究』「とほしろし」考 一六頁

#### D 実際の明日香川について

飛鳥川は客観的に見て決して雄大な河でもなければ、それほど激流な河でもない。

(吉田金彦『万葉語源 文学と語学をつなぐ』とほしろし 一三三頁)

#### 【考察】

ゝの中で、の考えが最も古くからあるため、を中心にして考えていく。は、し  
ろし」に「あざやか」の意味があるから、「いちしろし」にもまた「とほしろし」にも同じ  
意味があると考えたわけだが、A のように、トホシロシとシロシとでは意味が違い、さ  
らに「とほ」については考えられていないというところから、この考えは違うように思える。  
については、「いちしろし」「の」「いち」は至、「とほしろし」の「とほ」は達で、「いち  
と」とほ」は意味が近いと言ひ、そして「白い」と言うのは「あざやか」で、「さやけし  
と言うのと同じだと言っているが、それは B のように考えられ、これら について  
は C のように、「いちしろし」の「ろ」は「呂」を使い、「とほしろし」の「ろ」は「路」  
を使うため仮名が違い、仮名が違うなら発音も違い、発音が違うなら意味も違うと考えら  
れている。

やはり発音が違えば意味も違うといていた C の橋本の考えには頷けた。なぜなら  
ば、発音が違って同じ語に属したり、同じ意味になるような言葉は確かに多くあると思  
うが、似たような発音で同じ意味を持っている語の方が明らかに少ないと思われるからだ。

また、契沖は『日本書紀』(巻第二 神代下(第十段))に大 ホネトヲシツロシ 小と書かれていたこと、

橋本は石山寺所蔵大唐西域記の訓點(長寛元年に附したものに人骸偉大とあつたことな  
どから、「とほしろし」を「偉大・雄大」だと述べている。このことからみても、やはり「と  
ほしろし」は「雄大」と解釈するべきだろうと思う。ところが D のことから、明日香  
川はそれほどでもない川であると言っている。なぜ赤人は、明日香川を「雄大」と言っ  
たのであろうか。

#### 【まとめ】

「河登保志呂之」は、「雄大」の意である。しかし、三三四・三三五の歌に詠まれている  
明日香川はそれほど大きな川ではないのに、なぜ赤人は、明日香川を「雄大」と言っ  
たのであろうか。それは赤人が長歌の三三四と反歌の三三五の歌を、古都への慕情の深さを「孤  
悲」という心情で表わしていることから理解できる。明日香川を「雄大」と詠  
ったのは、赤人の古都に対する想いから、明日香川を誇張表現したのではないかと思われ

る。人は恋をした時、その相手を美しいなどと、その者を無意識に美化してしまう傾向があると思う。赤人が古都を男女間のような心情で見ていたのだとすれば、明日香川を見て「美しい(雄大)」と表現してもおかしくはないと考えられる。ただし勘違いしてはいけないのは、この歌の場合は、男女間としての「恋」ではなく「孤悲」なので、もう既になくなってしまった古都を、赤人は一人悲しく恋慕って、この歌を詠んでいたのである。

#### 【現代語訳】

最後にまとめを踏まえた上で、三三四・三三五番歌の自分なりの口訳を載せておく。

神のいます神名備山に たくさん枝を広げて 繁っている つがの木、その名のとおり  
いよいよ次々と 玉葛のように長くどこまでも 絶えることなく ずっとこうして いつ  
までも通いたいと思う 明日香の 古い都は 山が高く 川が雄大である 春の日は 山  
を眺めていたい 秋の夜は 川の音が澄みきっている 朝雲に 鶴は乱れ飛び 夕霧に  
河鹿が鳴き騒いでいる 見るたびに 声に出して泣けてくる 栄えたいにしえのことを思  
うと(巻第三・三三四)

明日香川の 川が曲がって流れが淀んでいる所を離れずに 立ち込めている霧のように  
思いが消える 慕情ではないのだ(巻第三・三三五)

#### 【参考文献】

- 中西 進 『万葉集辞典 万葉集全訳注原文付 別巻』 一九八五年十二月十五日 講談社  
橋本進吉 『上代語の研究』 一九八三年六月十四日 岩波書店  
吉田金彦 『万葉語源 文学と語学をつなぐ』 一九九一年二月二十五日 創拓社  
荒木田久老 『萬葉考榧落葉』 一九二四年六月十五日 古今書院  
小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・蔵中進・毛利正守  
『新編 日本古典文学全集2 日本書紀 一』 一九九四年四月二十日 小学館  
本居宣長 『本居宣長全集 第六巻』 一九七〇年六月二十五日 筑摩書房  
小野 寛 『新選 万葉集抄』 一九九三年四月二十日 笠間書院  
契沖 『契沖全集 第二巻』 一九七三年六月五日 岩波書院  
賀茂真淵 『賀茂真淵全集 第四巻』 一九八三年八月二十五日 続群書類従完成会  
小島憲之・木下正俊・東野治之  
『新編 日本古典文学全集6 萬葉集 一』 一九九四年五月二十日 小学館  
佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之  
『新日本文学大系1 萬葉集一』 一九九九年五月二十日 岩波書店  
『西本願寺本 萬葉集三(普及版)』 一九九三年九月二十五日 主婦の友社